

飼料情勢

1. とうもろこしのシカゴ定期は、12月には350セント／ブッシェル台で推移していたが、米国産の大豊作が確定する一方で、エタノール向けおよび輸出需要の増加や南米産の生育悪化懸念などを材料に370セント／ブッシェル台まで上昇した。その後、南米産の豊作期待から弱含みの展開となり、3月31日に米国農務省が発表した作付意向調査でとうもろこしの作付面積が市場予想を下回ったことや、米国中西部での降雨予報による作付け遅れの懸念から一時強含んだものの、降雨が事前予想ほどではないとの見方により、現在は350セント／ブッシェル台となっている。
2. 大豆粕のシカゴ定期は、12月には340ドル／トン台で推移していたが、多雨によるアルゼンチン産大豆の減産懸念などにより370ドル／トン台まで上昇した。その後、天候回復により減産懸念が後退したことから値下がりし、さらに3月31日に米国農務省が発表した大豆の作付け面積が市場の予想を上回ったことから軟調な展開が続き、米国中西部での降雨予報による作付け遅れの懸念から一旦は強含んだものの、米国中西部での降雨が事前予想ほどではないとの見方を背景に、現在は340ドル／トン前後で推移している。
3. 米国ガルフ・日本間のパナマックス型海上運賃は、米国ガルフ・日本間のパナマックス型海上運賃は、11月には35ドル／トン台で推移し、年末を控えた輸送需要の集中などにより40ドル／トン前後まで上昇した。その後、需要は一服したものの、中国向け石炭などの輸送需要が引き続き好調であることなどから38ドル／トン前後で推移していたが、南米産穀物の輸送需要が本格化していることや原油相場が堅調であることから、現在は40ドル／トン前半となっている。
4. 外国為替は、11月中旬には110円台であったが、トランプ新大統領の経済政策に対する期待が高まったことや、米国の利上げ観測が高まったことなどから急激に円安がすすみ、12月中旬には一時118円台をつけた。その後、トランプ新政権の政策が不透明であることなどから円高がすすみ、3月の米国の利上げ実施により一旦円安となったものの、地政学リスクの高まりと、トランプ大統領のドル高牽制発言などにより円高がすすみ、現在は109円前後となっている。

